

Title	プルーストの「書簡」：文学的営為との関連について
Sub Title	Sur la correspondance de Marcel Proust-le rapport avec son œuvre littéraire
Author	牛場, 暁夫(Ushiba, Akio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.67, (1995. 3) ,p.169(218)- 185(202)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	七字慶紀, 若林真両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0185">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00670001-0185</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# プルーストの「書簡」

——文学的営為との関連について——

牛 場 暁 夫

## I

1993年に完結したフィリップ・コルブ編注『マルセル・プルースト書簡集』（全22巻）は、5,000通近いプルーストの書簡を通して我々にきわめて貴重な資料をふんだんに提供してくれる。しかし、それと同時にプルーストにとっては書簡を交わすことが、彼の創作活動と密接に結びつき、基本的な精神の営みにも強く関連していることも明らかにしてくれている。特に友人たちや母親と交される書簡からは、『失われた時を求めて』にも相通じるプルーストの奥深い息遣いが伝ってくるのである。

例えば、コンドルセ校の一級下において、親しい文学仲間になったロベール・ド・フレールは、のちに文学者になりアカデミー・フランセーズ会員にもなるのだが、このフレールにプルーストは1904年4月後半、つまり32歳の時にこう書き送っている——「(こうあえて告白してもよいだろうか)、ぼくが君のなかで初めてもっとも好きになった点は、ミュッセも言うように、君自身ではなく、ぼくだった、というよりもむしろぼくとの関係における君自身だった(……)」<sup>(1)</sup>。つまりプルーストはフレールを、自己と切り離された他者としてのみ注視しているのではない、また他者として固定してとらえてもいない。両者の間の、相互の関係の働きかけそのものなかに入り、そこに執着しているのである。『失われた時を求めて』においても、セヴィニエ夫人の書簡について同様のことがシャルリュスの口を借りて述べられている——重要なのは、愛する対象ではない、愛するとい

うことそれ自体なのだ、と (J.F. II, p.122. Cf. Sw. I, p.155)。

同様の見方は、プルーストが死ぬまで深い友情を抱き続けた作曲家レーナルド・アーン宛の書簡からも読みとることができる。アーン宛書簡からはプルーストの心情がうかがわれることが多い——「君はいつもぼくと一緒にいて、ぼくは一晚中君と話をしている、だから君のことを考えている、と言ったのではとても言いたりないほどなのだ」(1912年3月)<sup>(2)</sup>。またこの少し前にも、プルーストは小説執筆に没頭しながらもアーンに書いている——「ぼくは、これはすてきだろうか、君の気に入るだろうか……とたずねながら、一晚中君とおしゃべりをして過ごしたところだ」<sup>(3)</sup>。創作の現場にも、他者との交信が求められている。

ダニエル・アレヴィも若い頃、プルーストの文学仲間となり、後述するように後にプルーストを含めた四人で書簡体小説を企てる。プルーストとアレヴィとのこうした長い交友関係には曲折があったものの、1908年5月末あるいは6月にアレヴィに宛てた手紙からは、プルースト特有の物のとらえ方が伝わってくる。父親を亡くしたばかりのアレヴィに対して、プルーストはお悔やみの気持ちを、一方的に吐露したり、述懐したりするのではなく、次のように書き始める——「ぼくは君に手紙を書きます、君がぼくに書いてきたのだから。(……)そして実際、この気持ち(アレヴィやその父親への思い—筆者注)は、もう途絶えなくなったし、もう途絶えることもないだろう、正しく表現するならば、ぼくが君に送るべきだったのは、一通の孤立した手紙ではない、むしろ連続する日記だったのだ。でも、少なくとも知っておいてほしい、ぼくの悲しみは続いているし続くだろうことも、そしてぼくの悲しみが、君と君のお父さんについて、ぼくと一緒にあって語り合うことも」(1908年5月あるいは6月末頃)<sup>(4)</sup>。

プルースト自身は、日記をつけなかったが、日記よりも、上の引用文の表現を使えば、「連続する日記」がプルーストにおいては重要視され、それも名宛人に送られて、公開されてゆくものとされている。日記さえも交話的機能を帯び、自己完結的な個人という性格は開かれてゆこうとしている。日記は、最終巻『見出された時』において使用されていて、主人公は模作

の「ゴンクール日記」をそこで読む。プルーストのねらいは、この「偽ゴンクール日記」の客観的でやや表面的で、あまりにも視覚に頼る描写を、主人公のようやく獲得し始めた文学観とここにおいて対比させ、「日記」には宿ることのない、プルーストの新しい文学上の次元のほうを強調することにある。つまり、ここにおいても従来の日記は、やや批判的にとらえられているのである。

述懐に終らず、差出人と名宛人の間を往復するこういった動きは、心理上の配慮とか文通上の礼儀といった域にとどまらず、プルーストのより深い精神の発現形態であるかのように思われてくる。例えば、プルーストが書簡のなかでしきりに繰り返す言葉に、*réciprocité*「相互性」があり、プルーストの16歳年上で、彼の美の教師役であったロベール・ド・モンテスキウ伯爵に対しても、プルーストはその交友の初期から相互性を要請することになる。プルーストとモンテスキウとは師弟関係にも近い立場にあり、そのすぐれた教養や社交界における立居振舞などをプルーストは学び始めていたのではあるが——「しきたりにあわせて、先生がぼくに挨拶の相互性を気にして下さるならば、明察に富み、友誼に厚い先生の不拔の——この種の事柄にしばしばつきものの儂い脆さに支配されぬ——御好意に勝る、より輝かしくより快きものはぼくには望み得ません」<sup>(5)</sup>。こうして新年の賀詞を1895年1月3日にプルーストは凝った決まり文句で述べてはいるものの、「相互性」をすでにその間に滑りこませている。そして、すでにその前年にもモンテスキウに、「相互の信頼が永久に生まれるものと思います」と書き送っている<sup>(6)</sup>。

また、『失われた時を求めて』に大聖堂の構築との密接な類似性を初めて見抜いたジャン・ド・ゲニュロンに、その点を感謝する手紙を書き送った際、プルーストはここにおいてもやはり「やり取り (*réciprocité*) という必要不可欠の条件」を持ち出している。そして「必要不可欠」の箇所はラテン語で *sine qua non* と記している (1919年8月1日)<sup>(7)</sup>。そしてこの書簡もゲニュロン宛の第一信なのである。

さらに特徴的なのは、プルーストがその才能をいち早く見抜き、ゴンク

ール賞に推そうと考えた当時の二人の新進作家ジャン・ジロドゥーとジャック・ド・ラクルテルに宛ててしたためられたプルスからの第一信の冒頭である。ジロドゥー宛の第一通では次のように筆が起こされている——「拝啓 そして友人へ（これが親密すぎると思われなければ。また、相互性が許していただけるのであれば）」（1921年7月）<sup>(8)</sup>。ラクルテル宛の第一通もこう始まっている——「親しい友、（こう呼ぶことを、これが相互のものになるという約束をしてくれたうで許してくれるのなら）」（1917年5月21日？）<sup>(9)</sup>。いずれの第一信においても、まだ vous が主語に選ばれてはいるものの、プルスは冒頭から深い相互性の約束をすでに取りつけようとしている。すでにプルスは、1893年10月23日付のピエール・ルイス宛の、やはり最初と思われる書簡の、今度は末尾において相互の訪問の許可を求めている<sup>(10)</sup>。そしてこの手紙の直前にピエール・ルイスは、『メレアグロスの詩、メレアグロスの生活態度』を出版している。こうして、文学的感興は、プルスに創作者と読者との相互交流を呼び醒ましてゆく。

コンドルセ校の文学仲間で詩人としての才分にも恵まれ、のちにアカデミー・フランセーズ会員に選出されることになるフェルナン・グレーグ宛書簡にも、その末尾にやはり念を押すように次のような文が読める——「相互性が真実のものであることを期待しています」（1905年7月2日？）<sup>(11)</sup>、そしてグレーグもその直前に詩集『刻々の黄金』を出版したところだった。儀礼上の決まり文句でもなく、友情の確認にとどまるものでもなく、プルスの場合、文学創造の現場にはこういった相呼応されてゆく人称間の働きかけが響いてゆき、独裁論的狭さは越えられてゆく。

1893年、同人雑誌「饗宴」廃刊後、プルスは同じ仲間たちのダニエル・アレヴィ、フェルナン・グレーグ、ルイ・ド・サルと共同し、四人で書簡体小説を執筆するという企てに乗り出す——相互に送り合うという時空間のなかで成り立つ創造の協同作業。プルスは恋に身を焦がす子爵夫人ポーリーヌ・ド・グーヴルになり、書簡原稿三通を執筆して送り出す。アレヴィは女心が理解できない老聴罪司祭、グレーグは詩人、ド・サルが思いを寄せるポーリーヌにつれなく振舞う美男の下士官になる。あらかじ

め定められた大筋の話に沿って各自が自由に書簡原稿を送り合い、あとから話をまとめてゆく方針は決まったものの、グレーグが何も執筆しなかったために、この試みはすぐに頓挫してしまう。

往復書簡による創作の試みは、しかしまだある。1889年にはプルーストは、「ベルナル・ダルグーヴル」の名前で「フランソワーズ・ド・ブレーヴ」宛に二通ばかり、「いとしい人」で始まる手紙を書き、これは「ラ・プレス」紙9月19日号と10月20日号に載る。そして、「フランソワーズ」からの返事がプルーストの友人ロベール・ド・フレールの署名入りで同9月20日号に掲載されることにもなる<sup>(12)</sup>。

複数の作者による創作の企ての例はまだ他にもあり、1906年には劇作家ルネ・ペテールと共同し、プルーストは自らが提供した題材を使い、パントマイムの台本を書き、五幕のうち二幕はプルーストが執筆する。また他にも、ルネ・ペテールとは同年メロドラマを共同執筆し、音楽はレイナルド・アーンが担当する予定でもあった。十二月にはこの戯曲を書きあげる勇気がないことをプルーストはジャンヌ・ド・カイヤヴェに書き送っているが、この台本の内容は愛情に本来内在するサディズムが主題となっており、これは『失われた時』におけるヴァントゥイユ嬢のエピソードにおいて展開されることになる重要なものである<sup>(13)</sup>。

## II

『失われた時を求めて』は、プルーストによって「一種の小説」とも表現されたのだが、この小説には実は50通以上もの手紙が登場する<sup>(14)</sup>。それも気送管速達、速達など多くの種類の郵便物が使われている。(なお、ここにはプルーストが強い興味を抱き、作品においても重要な役割を果たしている電話や電報は含まれていない。)しかし、当時のブルジョワたちはプルーストと違い、電話を、プライベートの生活を侵害するものとして嫌悪していた<sup>(15)</sup>、その例は、『失われた時を求めて』にも見つけることができる。

フランソワーズのモデルの一人セレスト・アルバレも、郵便係としてプルーストに雇われたのだが、このセレスト・アルバレはプルーストが手紙

を出すのを大変に好んでいたことを証言している<sup>(16)</sup>。プルーストはこのセレストとその3才年長の姉マリ・ジネストの二人の郵便係を、感謝の気持ちをこめて作品に登場させようとして、実名で『ソドムとゴモラII』に執筆したうえ、1921年11月になってもその当該箇所に加筆を希望していた。そしてその旨を、出版者ガストン・ガリマールに書面で申しこんでおり、プルーストの書簡に対する強い愛着はこういったことからもうかがうことができる (III, 240-244) <sup>(17)</sup>。

しかし、『失われた時を求めて』においてきわめて特徴的なのは、第六篇『消え去ったアルベルチヌ』において、主人公がかつてマルタンヴィルの三本の鐘塔について初めて執筆した短い文学創作が「フィガロ」紙に掲載され、それを主人公が読む場面である。若い主人公がコンブレにおいて初めて文学創作の喜びをおぼえて執筆されたものは、一度送り出され、かなりの時間を経たあと、新聞記事となって他の郵便物と一緒にされたまま——当時は新聞は少年によって宅配されていた——母親の手によって主人公のベッドの所まで届けられる。初めての創作活動は、往復する郵便という二重の移動によって成立する。創作は距離、時間をはきんだ、他者との往還から営なまれていて、創作という一見きわめて個人的な、固定した狭さは、当初から越えられているところがある。そしてこのような時、母親は積極的な役割をはたす。主人公は言う——「私が手にもっているのは、いつ刷られたともしれぬ新聞の一部なのではなく、刷りたての一万部のなかの任意の一部なのだ、それは単に私によって執筆されたものというだけではなく、私によって執筆されたうえに万人によってこの朝読まれたばかりのものなのだ。いまのこの瞬間に、よその家庭で起きている現象を正確に読みとるには、私はこの記事を、作者としてではなく、新聞の読者の一人として、読む必要がある、それは単に私が執筆したものというだけではなく、多くの人々の精神のなかに宿って受肉されたものの象徴なのであった。だから、それを読むには、私はひととき作者であることをやめ、新聞の読者の任意の一人であることが必要であった」<sup>(18)</sup>。カイエ2においてはさらに強調されていた——「私は自己から出なくてはならない」(IV, p.

673)。そして、コンプレのサン＝タン Dre・デ・シャンの教会の魅力を具現化している一人テオドールは、主人公の執筆した創作に対してさっそく手紙を主人公に送り、ここでもテオドールは応え合う空間に参画する。

文学が往還する回路によってとらえられる場面はほかにもあり、例えば少年の頃の主人公が、ぜひ読みたいと願うベルゴットの小冊子を手に入れる場面がそれである。主人公は知り合ったばかりのジルベルトにラシーヌについて書かれたベルゴットの小冊子をもっていないか尋ねる。ジルベルトがその題名を知りたがるので、その晩主人公はジルベルトに「プチ・ブルー」(気送速達)で正確な題名を送る、するとその小冊子は、主人公が送ったプチ・ブルーとともに翌日ジルベルトによってシャンゼリゼの公園まで持ってこられ、主人公はその本を愛読することになる。(I, 395-396)。

作品において重要な役割をはたすセヴィニエ夫人の書簡も、基本的にはこのブルースト特有の文学観を具現しているものと言えよう。このセヴィニエ夫人の書簡は作品中しばしば言及され、特に祖母が主人公にその真の魅力を教える。そして主人公はこの書簡に、やがてエルスチールやドストエフスキーにも共通する物のとらえ方を見出してゆく(II, 14)。主人公の先導役の一人シャルリュスも、セヴィニエ夫人の書簡の魅力を見抜く(II, p.122)。ところで、セヴィニエ夫人の書簡からは、例えば16世紀の書簡において理想とされたような雄弁は聞こえてこない。単声の、モノローグのようにして書き連ねてゆく書簡ではなく、彼女の手紙は、それが宛てられた娘によって読まれるものであることが強く意識されつつしたためられているのである。差出人と名宛人はここにおいても強い絆で結びつけられており、一方的で固定的な関係に終始しているのではない。また書簡における偉大な時代とも称されるこの十七世紀においては、セヴィニエ夫人の書簡などは、その価値を正しく評価しうるその知人たちに公開され、回覧されていたのである<sup>(19)</sup>。こうしてブルーストの場合、創作の現場には、自己と他者、書くと読むとが交替しうるベクトルが相互に働き合い、ある強い磁場が形成されてゆくのである。

母の置き換えでもあるこの祖母は、エルスチールのアトリエに主人公を  
(208)



訪問させるなどして主人公を「芸術」へと導く作中人物の一人なのだが、祖母はまた内と外との交流を、周囲の冷たい反応を無視してでも敢行する人であり、この内と外との自在な往復は、ブルースト特有の書簡の働きをいわば空間という側面から支えているのである。例えば、コンプレにおいても祖母は雨のなかを平気で濡れながら歩かし、バルベックの高級ホテルの食堂においても、ブルジョワの逗留客たちの響響を買うものの、その窓を開け、内と外との往復をはかるのである。

また、以上確認してきたブルースト特有の「書簡」の働きは、意外な箇所においても散見できるのである。晩年に執筆した評論「ボードレールについて」も、この執筆を提案したのがジャック・リヴィエールだったこともあるのだが、この評論はリヴィエール宛の「長い手紙」だとブルーストはガストン・ガリマルに書いている（1921年4月19日あるいは20日）<sup>(20)</sup>。そしてこの評論は発表されることになるが、「親愛なるリヴィエール」という書き出しを冒頭に付けたままなのである<sup>(21)</sup>。また同様に、評論「フロベールの『文体』について」にもブルーストは当初、「親愛なるリヴィエール」を残すことをやはり考えていたが、こちらのほうはこの書簡体形式の評論にリヴィエールが反対したために実現しなかった<sup>(22)</sup>。こうしてブルーストにおいては、評論という、およそ書簡とは相容れないジャンヌのなかにも、特有の交話的要素が響くのである。

これは『サント＝ブーヴに反論する』において部分的に採用されている母親——当時すでに死去していた——との会話体を想起させるものである。特に『サント＝ブーヴに反論する』の一断章「サント＝ブーヴとボードレール」は、加筆メモ以降は母親へ呼びかける形式で終始まとめられることになる。書簡と会話とでは形式が異なるものの、評論においても〈私〉と〈あなた〉との人称間相互の呼びかけ、働きかけがブルーストにおいては文学上の発想の強い促しになっていたのではないだろうか。とりわけこの『サント＝ブーヴに反論する』におけるバルザック論断章といえ、『失われた時を求めて』の直接の母体である小説『サント＝ブーヴに反論する』の発生現場ともなっているのである<sup>(23)</sup>。

同様に興味深い点は、プルーストがしきりに用いた P. S. (追伸) が、手稿のなかにもやはり使用されていることである。最終巻『見出された時』の草稿帳のひとつカイエ57においては、原稿の用紙の下にまるで尻尾のように足された付箋原稿 (パプロール) の二ヶ所に渡り P. S. が書きつけられているのである。最初の P. S. が記されているのは、「ゲルマント大公夫人邸の午後のパーティー」の箇所であり、そのパプロールには編者たちによって次のような題が断片ごとに順に付けられている——「老歌手とその娘」(12表面)、「女歌手の服装」(12裏面)。そしてそれにさらに足された一ページ分のパプロールの裏面の頭に、P. S. が記されていて、その断片の題名は、編者たちによって、「滑稽な朗唱」とされている——その内容は、新進の詩人による自作の朗唱は、当初は奇妙なものに聞こえることもあるが、次第にその朗唱に人は慣れてゆくものであり、その真の価値が味わえるようになってゆく、というものである。これは『失われた時を求めて』においてさらに展開されることになる重要なテーマなのだが、この断片の最上段に P. S. が一度書かれ、そのあと、線を引いて消されているのである<sup>(24)</sup>。

しかし、P. S. が消されずに残されているパプロールが、同じカイエのもう一ヶ所別の所に存在する。これは一ページ分だけの短いパプロールの表面の最上部に書かれている。そして、その断片には、「ソナタのあとを追いつめていくかのようなピアニスト」という題が付けられている (52表面)<sup>(25)</sup>。注目すべきなのは、この二つの P. S. は——その一方は抹消されたものの——いずれも芸術に関する重要な箇所に付けられていることである。こうして、草稿においてさえもプルーストにおいては文学・芸術の営為が展開される箇所には独我論的要素は希薄になり、交話的志向が潜み、交わされ、息づくのである。

このほかにも創作活動と書簡執筆との密接な関連を示す例はある。例えば、『ゲルマント—のほう』が出版された際、プルーストはその巻頭にレオン・ドーデへの献辞も刷りこませていたのだが、刊行後プルーストはその巻頭の下に今度はペンで短い献辞=手紙を二通、やはりレオン・ドーデ宛  
(210)

に書き足して、その手書きの第一通目は印刷された献辞をさらに内密な調子で補ない、また手書きの二通目はレオン・ドーデ夫人へ感謝の気持ちを伝えるよう依頼するものとなっている（1920年10月18日）<sup>(26)</sup>。あるいはまた、プルーストはリュシアン・ドーデからの書簡を高く評価し、次のようにも書いている——「君からの手紙の抜粋で大部分が構成されているような書物が書かれるべきだろう」（1918年8月14日）<sup>(27)</sup>。あるいは、ルネ・ボワレーヴの小説については——「あなたの数冊の著書は、私にとっては恋文のようなものです」（1922年5月8日）<sup>(28)</sup>。書物が書簡に比せられ、またその逆も起こるというプルースト独自の相互性の修辞もここからは読みとることができよう。

さらに、『失われた時を求めて』の執筆を開始してからプルーストの書簡の数が増していることも指摘できよう。1912年からはその前年に比べ二倍の書簡が書かれ、1917年以降死ぬ年の1922年まで書簡はふえ続けてゆく。逆に、執筆活動がきわめて不活発だった1907年には、書かれた手紙の数も他の年に比較して減少しているのである。

創作現場に通うこういった往復書簡の息遣いは、ある面でジッドにおける日記の役割と比較検討することができるであろう。というのも、ジッドは創作のなかに日記を多用したからである。あの有名な『日記』だけにとどまらず、ジッドは『パリュード』、『狭き門』、『田園交響楽』、『女の学校』のなかに「日記」を使い続けたのである。いずれにせよ、ジャンルという文学概念を重要視した一世代年上の批評家ブリュンチエールとは異なり、プルーストやジッドの世代は、多様な文学形式を、多様な主体、自我を新しい柔軟な目で、複眼的にとらえ始めたのである。

### III

ところで以上確認してきたプルーストの「書簡」には、母親と交した書簡が強い影響を与えているように思われる。特にプルーストの書簡の独特な書式は、母親から送られてきた書簡に多く見られる書式でもあるのである。母親と交した書簡の数は多く、それにはさらにプルーストが母親と家

のなかで交した短信が加えられる。つまり、プルーストは母親が朝起きる少し前に就寝していたため、彼は母親宛の短信をしばしばアパートマンの入口に置いていたのである。

例えば、プルーストの書簡においては、「親しい友」や、「ぼくの親しい友」が多用され、本文中においても改行された箇所に書き出しと同じようにしてそれが繰り返し使われてゆくことがあるが（例えば、1894年8月27日あるいは9月3日付けのレイナルド・アーン宛書）<sup>(29)</sup>、しかしこれは母親がマルセルに宛てた手紙でしきりに使った書式である——「坊や」(Cher petit) で書き出された手紙のなかには、本文中に「私の坊や」(mon chéri) が三回、「私の狼さん」(mon loup) が一回使われている書簡も残されている（1890年4月23日）<sup>(30)</sup>。

とりわけ特徴的なのは、二人が多用する P. S., つまり追伸、再伸などの多さとその使われ方である。プルーストは母親に第四伸（ただ「四つ目」とだけ表記されることもある）まで付けた手紙を書き送っているし（例えば、1896年10月21日）<sup>(31)</sup>、親しい友人アントワーヌ・ビベスコにも第四伸までである手紙を書いているが、ここでは追伸の前に二度までも署名をしまっている（1903年4月3日）<sup>(32)</sup>。また、こうして数多く用いられる P. S.（追伸）は、独特な使われ方をする時がある。プルーストはこのビベスコに1902年6月6日の朝に一通手紙をしたため封筒に入れるが、その直後に P. S. を書き、この P. S. を別の封筒に入れ、これは第一通目とは別の手紙であるということわりを第一通目の末尾に付け足してから、これらの二通を発送している。この不思議な書簡をプルーストは、1908年7月18日に友人リュシアン・ドーデに対してもほぼ同様にして送っている<sup>(33)</sup>。また、プルーストの親しい秘書となり、タイプ清書の監督も行ない、アルベルチーヌのモデルの一人とも言われるアルベール・ナミアス（息子）には、プルーストは P. S. のみを二通入れた封書を一通送ってもいる（1911年12月3日）<sup>(34)</sup>。

こういった「追伸」を母親も実は書いていたのであり、例えば母親はフォンテンブローの郵便局でプルーストと「私たちの大好きな電話」で話し

たあと、母親はその郵便局ですぐに手紙を書き始める——「私の坊や、私たちのあまりにも短かった、ほんのわずかな対話の続きですが.....私が言っているのは、ですから（.....）」（1896年10月20日）<sup>(35)</sup>。母親も追伸を多用していたのであり、例えばプルーストに「追伸（用向きの）」を本文の末尾に足したりもしている（1903年8月20日）<sup>(36)</sup>。また、母親は1896年9月24日にはプルーストに、「私たちの書簡は会話になっていますね」<sup>(37)</sup>で、その手紙を始めてもいる。

#### IV

『失われた時を求めて』において使われている50通の手紙の多くは、しかし以上述べてきたような類いのものでは実はない。創作行為と密接に関連する往復の動きは見せない場合が多く、片便りも多く、誤解や嫉妬に結びつく手紙のほうが多いのである。出奔したアルベルチーナには主人公はサン＝ルーを送り、直接彼女に宛てた手紙は書かない。主人公とジルベルトとの間、またアルベルチーナとの間で往復書簡が交されるように思われる箇所もあるが、それは実はジルベルトやアルベルチーナからの返書を待ち焦がれるあまり、主人公が勝手に一人で思い描いてしまった架空の返信であったりする。また、オデットは恋の手練手管にたけ、手紙を巧みに用いるものの、その一方的な発信はスワン宛書簡においては虚偽に満ちていることが次第にはっきりしてくるし、オデットからフォルシュヴィールに宛てた書簡は、スワンの嫉妬をかき立てるだけで終わる。

片便りは誤解も生みやすく、アルベルチーナの死後配達されてきた電報——期待していた返信——の差し出し人を、主人公は誤ってアルベルチーナだと思いこむし、そしてジルベルトは夫サン＝ルーに宛てられた彼の情人ベベットについて、特にその性別に関して誤解をしてしまう。あるいはまたヴィルパリジス夫人のように、書簡を毎日のように交わすこと自体が理解できず、セヴィニエ夫人の書簡をその点から批判し、そのため祖母の気をそこねてしまう作中人物もいる。このようにして『失われた時を求めて』においては多くの、特に恋愛に関する一方的な片便りがあり、それら

が対比的になってプルースト特有の創作活動に密接に関連する数少ない往復書簡を逆に浮彫りにしてゆく。少しずつ見えてくる影と光、次第に不毛なものとかかる面と、あまり目立たなかったものの、逆に少しずつその真価が認められてゆくもの、その両者の交錯と逆転——例えばサロン、恋愛と芸術——これはプルーストの作品の基本的な展開のひとつでもある。

またプルースト特有の往復書簡の双方向性は、異なった角度からやはり補強することができる。例えば、プルーストは手紙においてだけでなく話し方一般においても一方的な独白的展開を嫌っていて、雄弁に対し警戒心を抱いていた。『失われた時を求めて』に登場する外交官ノルポワの型通りで内容に乏しい雄弁は、批判的に長く書き写されているし、またソルボンヌ大学教授ブリショの数次に渡る学術的語源談議の長広舌には皮肉がこめられ、ラ・ラスプリエールに向かう軽便鉄道の動くサロンと化したコンパートメントで語り続けられるブリショの語源講釈——当時流行していた——はユーモラスですらある。コンプレの司祭の語源開陳には作品の展開を予告する細部が含まれているものの、ノルポワやブリショに共通する狭い博識的銜いも含まれている。事実、三者は作品の結末辺りではその存在を希薄にしてゆく。また、コンプレの司祭は、ブリショによって長く批難されることになる。そして、ブリショはまたセヴィニエ夫人をスノップとして批判したりもする。

ジャン・コクトー宛書簡においても、雄弁は「性格上の弱さを覆い隠すことになる防衛手段」にすぎない、とプルーストは書いているし（1910年12月？）<sup>(38)</sup>、また雄弁ではないにしても自分のことのみを一方的に吐露し、述懐し続ける態度への反感をプルーストは死ぬ年にロベール・クルティウス宛書簡に書いている——「まったく、こうして自分のことや身内のことを、いつはてるともなく話し続けることはひどくいやなことです。ところでまさに湧き上がってくるのは、あなたに対する感嘆に満ちたこの友情なのです」（1922年9月17日あるいは18日）<sup>(39)</sup>。これはすぐれたロマンストのクルティウスに宛てて書かれた第二信目の文面からの引用である。

しかし他方、相互からの呼びかけで成立つ書簡の空間に入ろうとしない

文通相手には、プルーストは珍しく激怒したりもする<sup>(40)</sup>。

## V

プルーストの書簡のなかには、過度なまでの心遣いや、計算づくや、甘えなどが散見できる場合も多い。何を伝えたいのか明瞭でない手紙もある。なにしろプルースト自身が書いていた内容を途中で忘れてしまった母親宛書簡も残されている（1905年5月頃）<sup>(41)</sup>。

しかしそれにもかかわらず、プルーストの狭い個我を超えて響き合うような、交話性の時空間、双方向への志向、呼びかけあう動きへの希求は、文学の営みとなって息づき潜んでいて、多様な形をとって反覆されてゆく。アンナ・ド・ノアイユ伯爵夫人とはプルーストは自然描写などにおいて深い共通性を覚えていたのだが、その彼女に1905年6月18日に書き送っている——「共感というものは、ショーペンハウエルが言ったように、個人の中に存在する人為的な柵を取り壊し、世界の統一性を実現するものなのです（……）」<sup>(42)</sup>。この態度をプルーストは一貫して保ち続けたと思われる、これによく類似した、「個人的な自己という柵」、「その柵は崩れ落ちた」、といった表現は、「ギュスターヴ・モローの神秘的世界についての覚書」でも用いられている<sup>(43)</sup>。やはりのちに文学者として知られるようになる、まだ若いエマニュエル・ベルルに1916年、やはりその第一信においてすでに語りかけている——「親しい友、（……）私ほど友情をもって物事を愛する人は他にいないだろう」<sup>(44)</sup>。

しかしここに繰り広げられているやり取りには、何かしら友情という域を超えてしまっている所がある。ここで交されているのは、人称相互の、〈我—汝〉の深い信頼に基づいた働きかけなのである。表面的な友情をプルーストはむしろ避けているし、すでにラスキンの『胡麻と百合』仏訳の序文「読書について」でも、ラスキンが読書を良い友人に比較しているのに対し、プルーストは会話は深い思慮は生まないとして、真の読書は孤独のただ中における交流を生むものだ、と語っている。

ジャック・ブーランジェはプルーストとジロドゥーを高く評価する記事

を1921年7月30日の「オピニオン」紙に書くが、これに対してブルーストは最悪の体調を一時的であれ脱したときに、書くことは祝祭だという言葉を使って次のように応える、彼の死のほぼ一年前のことである——「でもこの二日間は再び快方に向かい始めたようです。そこで、私は自分に小さな祝祭を与えています、あなたに手紙を書いているのです」（1921年8月上旬）<sup>(45)</sup>。透徹する交話の働きかけから生まれる祝祭。

書簡のやり取りそのもののなかを生きるこの営みは、ある面ではまたきわめて今日的な問題を提起しているとも言えるのではないか。自我の再検討期にある現在、例えば、デリダはその『絵葉書』のなかで書簡における差出人と名宛人その人自身よりも、その両者の間の交流の過程そのものにやはり注目しているのである——「君はいつもあそこ、彼方に存在している。行く—来る、の過程にある」<sup>(46)</sup>。

また、『ジッド＝ヴァレリー往復書簡』と照らし合わせて考察してみれば、ブルーストは書簡においてはヴァレリーよりもむしろジッドに近い立場にいたのではないだろうか——ブルーストはジッドと同じように、相手と明確に区別された主体を確立させて対置するのでもなく、また逆に主体性が希薄のあまり相手の支配下に入るというのでもないからである<sup>(47)</sup>。

ブルーストは読書を精神活動へと導く「働きかけ」と考えていた。彼の書簡の問題も、こういった面と共通し、共鳴する深い内的な必然性、希求によって貫かれ、支えられているのである<sup>(48)</sup>。

## 注

- (1) *Correspondance de Marcel Proust, Texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Plon. t. IV, p. 114.* (以下 *Corr.* と略す)
- (2) 『ブルースト全集第17巻 書簡II』, 筑摩書房, 307ページ。
- (3) 同書, 584ページ。
- (4) *Corr. t. XVIII. pp. 584-585.*
- (5) 『ブルースト全集第16巻 書簡I』, 筑摩書房, 81ページ。
- (6) 同書, 66ページ。
- (7) *Corr. t. XVIII, p. 359.*
- (8) *Corr. t. XX, p. 333.*



- (9) *Corr. t. XVI*, p. 141.
- (10) *Corr. t. I*, p. 244.
- (11) *Corr. t. V*, p. 284.
- (12) 『ブルースト全集第15巻』, 185-201ページ。
- (13) ジョージ・D・ペインター『マルセル・ブルーストー伝記』下巻, 岩崎方訳, 筑摩書房, 1972年, 66ページ。Michel Erman, *Marcel Proust*, Fayard, 1944, p. 131.
- (14) Annick Bouillaguet, *Marcel Proust, Le jeu intertextuel*, Ed. du Titre, 1990, p. 67.
- (15) Eugen Weber, *Fin de siècle, La France à la fin du XIX<sup>e</sup> siècle*, Fayard, 1986, pp. 97-98.
- (16) Céleste Albaret, *Monsieur Proust*, Robert Laffont, 1973, pp. 243-245.
- (17) *Corr. t. XX*, pp. 547-548.
- (18) 『ブルースト全集第9巻, 逃げざる女』, 218-219ページ。
- (19) 例えば, 〈Introduction〉, in Madame Sévigné, *Correspondance I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1977. *Dictionnaire des littératures de langue française* (Bordas) 《Correspondance》の項を参照。また, 『セヴィニエ夫人手紙抄』井上究一郎訳, 岩波文庫, p.68参照。
- (20) *Corr. t. XX*, pp. 196.
- (21) 『ブルースト全集第15巻』, 23ページ。
- (22) *Corr. t. XX*, p. 211.
- (23) 『ブルースト全集第14巻』, 513ページ。
- (24) Marcel Proust, *Matinée chez la Princesse de Guermantes, Cahiers du Temps retrouvé*, Gallimard, 1982, p. 315.
- (25) *Ibid*, p. 412.
- (26) *Corr. t. XIX*, p. 532.
- (27) *Corr. t. XVII*, p. 342.
- (28) *Corr. t. XXI*, p. 178.
- (29) *Corr. t. I*, pp. 320-321.
- (30) *Corr. t. I*, pp. 138-139.
- (31) 『ブルースト全集第16巻 書簡 I』, 130ページ。
- (32) *Corr. t. III*, pp. 284-286. 母親宛書簡にも同じ形がある (1904年8月11日, *Corr. t. IV*, pp. 209-213)。
- (33) *Corr. t. XXI*, p. 636-638.
- (34) *Corr. t. X*, p. 383.
- (35) *Corr. t. II*, p. 134.
- (36) *Corr. t. III*, p. 406.
- (37) *Corr. t. II*, p. 131.

- (38) 『ブルースト全集第17巻 書簡II』, 260ページ。 Cf. *Corr. t. XVIII*, p. 459.
- (39) *Corr. t. XXI*, p. 479.
- (40) レオン・ラジヴィル大公宛, 1905年2月?28日 火曜日朝, あるいはアルベール・ナミアス(息子)宛, 1912年8月20日 火曜夜 『ブルースト全集書簡II』, 328-331ページ。
- (41) *Corr. t. V*, p. 172.
- (42) 『ブルースト全集書簡I』, 433ページ。
- (43) 『ブルースト全集第15巻』, 278ページ。
- (44) *Corr. t. XV*, p. 27.
- (45) *Corr. t. XX*, p. 413.
- (46) Jacques Derrida, *La carte postale—de Socrate à Freud et au-delà*, Aubier-Flammarion, 1980, p. 196.
- (47) 『ジッド=ヴァレリー往復書簡2』, 二宮正之訳, 筑摩書房, 1986年, 510-514ページ。
- (48) Cf. Akio Ushiba, 《L'Aspect dialogique d'A la Recherche du temps perdu》, in *Equinoxe*, no. 2, Rinsen Books, 1988, pp. 125-153.